

第4班 2008年度第1回会合概要

日時：2008年12月21日（日）11時～16時30分

場所：東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2

出席者：秋田茂、秋葉淳、栗屋利江、池田嘉郎、宇山智彦、川島真、古矢旬、守川知子

新学術領域研究が採択されてから最初の第4班の集まりである本会合では、各人の研究内容と問題関心を紹介し合い、今後の研究の方向性を議論することを目的とした。

班の代表・副代表である宇山と秋田は、問題提起・論点整理の報告をした。宇山は、帝国の構造・類型の研究と帝国主義・帝国意識・ポストコロニアル論の接合を意識しつつ、ロシア帝国を中心に各帝国史の研究の趨勢を整理した。帝国史と現在の帝国的世界秩序の接点としては、「バーゲニングの場としての帝国」という論点を提起した。また、本班の主な課題を再確認したうえで、最初から無理に一つの方向性にまとめるよりは、個々の研究から生まれた知見を他に適用していく、学び合うプロジェクトでありたいということ、ただし最終的には、歴史研究としての特性を重視しながらも「地域大国論」に収斂させなければならないことを述べた。

秋田は、「比較と関係性」がグローバルヒストリーのキー概念であること、諸地域をつなぐイギリス帝国の研究が重要な役割を持っていることを述べたうえで、ヨーロッパと東アジアにおける経済発展経路の分岐をめぐる「長期の18世紀」論、ヘゲモニー国家と国際公共財をめぐる議論など、比較史・関係史の諸論点を具体的な研究に沿って整理した。そして、同時代性・共時性を重視した地域間比較と関係性の研究を提唱した。

他のメンバーのうち、秋葉は、末期のオスマン帝国に関して、旧式の国家として見るよりは他の帝国との同時代性を強調する研究が近年盛んであることを指摘し、「オスマン化」「オリエンタリズム・文明化の使命」「植民地」「交渉／取引」「シティズンシップ」「トルコ化」などのキーワードを挙げた。守川は、多民族国家イランが帝国的要素を持ちながら帝国と呼ばれなかったのはなぜかという問題を立て、歴史学がヨーロッパから入ってくる過程でイランが「偉大な国」意識を持ったこと、現在は国民国家としての地域大国性を強調していることを紹介した。

川島は、中国史に関して帝国の遺産と国家建設を考える際の論点として、冊封・朝貢の再定義、藩部における省建設などの近代的再編、清朝の朝鮮に対する不平等条約と租界開設、日本のアジア主義と中国のアジア論の相関性、共産党のアジア・アフリカ政策と懲罰外交、少数民族政策などを挙げた。栗屋は、インド近代史におけるジェンダーに関して、植民地期の近代家族の構造・表象、親密圏と暴力、消費文化の受容、歴史叙述の登場と変容といった論点を紹介し、史料の制約により前近代の女性のあり方がよく分からないため近代における変化を論じることが難しいと指摘した。

池田は、近年のソ連史研究におけるネイション・ビルディング論やアフターマティヴ・ア

クシオン帝国論を紹介しながら、ロシア・ソ連がヨーロッパの統治原理の実験場であったこと、家族共同体・公地公民制といったアーカイックな権力空間に共和政（ナショナルな原理）が投入されたため、逆にナショナルな原理が超近代的・前近代的に変容したことを指摘した。古矢は、アメリカもまさに統治原理の実験場であり、無限の包摂性を持ちながらも、他者としての女性と黒人の位置づけに苦しんできたこと、オバマ大統領の登場で帝國的姿が薄まる状況の中で、改めて「アメリカ帝国」論を見直す必要があることを指摘した。

これらの問題提起や発言に対して、他のメンバーから多くの質問・意見が出され、活発な意見交換が行われた。

会合では実にさまざまな論点が出たが、同時に、異なる国・地域を対象とした研究の間で自然に似たような関心や研究潮流が現れていることが実感できた。比較の論点として挙げたものを整理すれば、概ね以下のようになろう。

- a. 統治原理に関わるもの：権力論、異民族・辺境統治（権力と地方社会の相互作用）
- b. 認識論に関わるもの：国家意識、空間表象、歴史認識
- c. 社会変容に関わるもの：ジェンダー、経済発展

比較にあたっては、複数の帝国を横断して時代の文脈に乗せる「同時代性」の観点が重要になる（ただし、時代を超えた比較も排除するわけではない）。また、帝国間・地域間の関係性の論点として、国際秩序・外交の問題（権力論に連なる）と、人・物の移動の問題（社会変容に関わる）が挙げられる。

これだけ多くの論点を結びつけるのは大変な作業であり、プロジェクトの最終成果を取りまとめる際には論点を絞る必要があるが、当面は自由に議論し、知恵を出し合っていきたい。

（文責：宇山）